

『白石先生琉人問對』について』を読む

— 宮崎道生君に答う —

東恩納寛惇

宮崎道生君から、全君の近業「白石先生の琉人問對」の論考所載の国史研究才十七号を寄せられ、一読の榮を得た。論考の内容は既定の史実に対する紹介であつて、取り立てゝ異を立てるものもないようであるが、南島志中、親雲上の対音として出してある牌古米及び牌金の借字について、かつて私が、白石自身その字面のまゝ、「ハイキン」とよんだものであるらしく、琉球使人の筆答を白石が勝手に訓又を入れたものであると考へていたに對し、使人等の発音を白石自らあの字面で書取つたものではあるまいかとの疑問をもたれ、それに因して私の解答を促されたので、それに応じてこの筆を取つた。

一、白石と應對の使人
まず第一に私は白石と問對したのは一行中の誰であつたかを考へて見たいと思う。

私はこれも私が何に書いたかは今はつきり覚えていないが、宮崎君に依ると、程順則であると云つたらしいが、それでよいと思う。然るに故伊波普猷君が玉城朝薫ではなかつたかと云う異見をもつていたと云う事を引きあいにして、いずれが正しきか更めて所見を求められた。けれども私は朝薫ではないと自認を主張するものである。程氏は正徳四年問對の時には、五十二才(四十才とある伊波君の説はまちがひ)の老熟特に琉球才一の碩学として内外に重きをなしていたばかりでなく、この行には筆頭守翰使として、白石が琉球國書向題

として取り上げた漢文式の書簡も亦彼れの起案であつたが、朝意は後に五番組踊を創作したほどの文人ではあつたにしても、この時には弱冠二十一歳の楽正に過ぎず、尤も和学にも通じていたところから、或は通詞の意味で、その席に侍した事もあり得たではあろうが、本来ならば使人應對の席に列するほどの身分ではない。程氏等と同時代に出た阿嘉（あか）直識が子孫を誡めた遺言書の一節に

貴高人の御前へ伺候仕候時は、いかにも相煩ふ、多言に無之、まひらめきへ出しやばると云う意味の方言なる事申上向敷事、

とあつて、これがその頃の若輩の嗜であつた。されば程太人を差しおいて、白石と應對することなど思いもよらぬ事である。殊に程氏は郷党の向では、名護（なご）程順則の采邑聖人と云われたほどの人で、恰度その頃親しく面接した薩摩の画人木村探玄が、「実直のかたき人にて、雑談などいはずる人のよし」と批評しているほどの謹厳な

人であつたから、その席で若輩朝薫などがさし出がましい口を利く場合ではなかつた筈である。

牌金のような特殊の字面も、單に発音を写すだけの要としてはこりすぎている。白石ならば、むしろ東雅流に仮字を使用する筈ではなかつたか、琉球の発音には、「ハイ」と云う音はない。すべて「フエー」となる。饅牌（テインペー）、位牌（イフェー）の類——向対（モンタイ）でも琉球音では「ムンテー——」である。牌金で「ペーチン」を表示したのは、程氏自身の作意と見る外はない。それを白石がメモして、自ら訓みを入れたものであろう。宮崎君自身引用された形影夜話の一節に、

我は記憶あしき故、宵よりの咄、一の／＼かく預付し置也、各歸りし後、清書し侍る也、とあるように、応答のメモを後に一々検討したようであるから、牌金の二字も後に推議して「ハイキン」としたものに違いない。

白石のこのような後の詮議には、往々にしてま

方がいもある。たとえば、々米島の頂謝（マシメ）を慶長丈量の際、検地帳には、土地の発声のまゝを取つて「マシメ」となっているが、白石がそれの地理書がこれに依つて、真謝湾を「町屋入江」としてある。これなどは、白石の後の詮議が後人を誤つたもので、牌金の場合もそれと同様の流義で後に藤田劔峯博士を誤らしている。慶長竿入の時の係貸達は耳なれない地名等力ナ書で記帳したものが多く、その爲め、どんな誤を伝えたものが少くない。たとえは大島の笠利（カサリ）を、方言では「カサン」と聞えるところから、検地帳に「何山」と記帳され、それが後世「阿山」と誤記し、現に「アサン」と唱えられる。又屋宜内（ヘマギウチ）は屋宜済の事であるのに、薩摩人等が景気のよい字面を撰んで「焼打」とし、そのまゝ現に使用されて、薩摩の焼打にあった所と云う伝説までも生んでいる。こう云つた種類の誤用は枚挙に遑ない、牌金もこの種の誤認にすぎないであろう。

二、南島志の参考書

これは宮崎君も觸れられたように、必要な書目は大方挙つてゐる。中でも最も多く参考されたものは、嘉靖中午の冊封使人陳侃の使録と、慶長十年の袋中神道記とである。その中陳侃に最も傾倒したのしく、文章もそのまゝ転用した箇所がある。その風俗を叙した中に、

（南島志）上衣下裳、真裳如裙、而倍其幅、褶細而制之、長掩其足也、上衣之外、更用六衣、玄袖者、蒙之背上、見人則以手下之、而蔽其面、（陳侃録）上衣之外、更用幅如帷、蒙之背上、見人則以手下之、而蔽其面、下裳如裙、而倍其幅、褶細而制、覆其足、

（南志）国無医藥、民不夭札、

（陳録）国無医藥、民亦不夭札、

以上の引例によつて、二者の関連性は容易に看取する事が出来よう。

官職特に位階に関する制度は慶長以前までは整備していなかつたので、前出の二書に牌金等の文

字を検索する事は出来ないばかりか、汪楫、張寧、札等程氏以前の使録にも、これを発見する事が出ない。従ってこれは程氏の作爲であると見る外はない。程氏は徐葆光の要請によつて、三十六島の名を注したほどであるから、この種の作字にはなれていた事でもあらう。

要言

以上私の所見を要約すると、正徳四年、新井白石と向対した琉球使人は、程順則で、或は玉成朝薫が補佐役として、言葉の取次くらいはしたかも知れない。それにしても、それは取次であつて、本人の意思は加わつていない。親雲上の発音を教える爲めに、清音に精通した程氏は、牌金の二字を作爲した。それを白石はメモし、持ちかえつて、推読して「ハイキン」の訓みを入れた。白石のこう云つた流義の後の詮議には、往々にしてま方がいもあつた。牌金もそのま方がいのである。

(一九五九・八・二七)